



Title	「火焰木」のなかの「雀こ」 : 附・「火焰木」目次
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	太宰治スタディーズ 別冊. 2017, 3, p. 20-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/62139
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「火焰木」のなかの「雀こ」

——附・「火焰木」目次

斎藤理生

太宰治の「雀こ」は、「作品」一九三五年七月号に、「玩具」に続けて掲載された（目次には「玩具」のみ記載されている）。『晩年』（砂子屋書房、一九三六・六）には独立して収録され、以後『晩年 太宰治第一短篇小説集（第一小説集叢書）』（砂子屋書房、一九四一・七）、『晩年（養徳叢書15）』（養徳社、一九四六・四）、『晩年（新潮文庫）』（新潮社、一九四七・一二）、『晩年（太宰治代表作集）』（新潮社、一九四八・七）、『太宰治全集第一巻 晩年』（八雲書店、一九四八・九）に再録された。

以上の内容は、山内祥史「解題」（『太宰治全集第一巻』筑摩書房、一九八九・六）をはじめ、先学によって明らかにされてきたことである。本稿で紹介するのは、「雀こ」が、作者生前に、これまで学界で知られていなかった雑誌に再録されていた事実である。

雑誌の名は「火焰木」。掲載されたのは第三号（目次と奥付

で第3号と表記され、表紙では「VOL. II NO. I」と記されている）。一九四八年一月一〇日印刷。同一五日発行。編輯兼発行人は早川利康。発行所は東京都江戸川区小岩町三の一三二五 火焰木社。定価二〇円。全三二頁で、二頁から七頁にかけて「雀こ」が掲載されている。

S・Tによる「後記」には、次のように記されている。

太宰治氏からは特に『雀こ』の再録の御承諾を得た。これは、『詩』と云ふものと、『小説』と云ふものの限界を、はつきり考へてもみずに、行わけ散文を、ぼんやりと、或は、懸命に、のたのた、せつせと書いてある態の詩人たちにほんのチヨツピリではあるがお薬として用ひていただかうといふ配慮のもとに太宰氏には、大麥、御無理を強いた様な訳である。

どのような形によってかは定かではないが、おそらく一九四七年一月から二月ごろに、太宰本人の許可を取り付けた上で再録したことがわかる。

では、「火焰木」とはどのような雑誌だったのか。稿者が古書店で手に入れたのは、創刊号から第三号までの三冊である。三号で終刊したのか、それ以降も続いたのかは不明である。ただ、全国の図書館・文学館等でもほとんど目に見えないことから、長く継続したとは想像しにくい。敗戦直後、日本各地で大量に発刊され、ほどなくして消えていった雑誌の一つと見られる。

創刊号は三二頁。一九四七年三月一〇日発行。編輯兼発行人は關澤潤一郎。発行所は東京都杉並区馬橋三の三三九の火焰木社。定価一〇円である。奥付の「編集同人」には宇津木賢・田中園人・早川利康・高橋謙三・長谷部龍・關澤潤一郎の名が記されている。創刊号の「同人雑記」を読むと、宇津木が雑誌創刊の中心であり、田中が協力し、高橋は田中に誘われたことがわかる。また、早川と長谷部は、宇津木と「詩洋」に集った仲間であった。

「詩洋」は一九二四年一〇月に、前田鉄之助を中心に行われた雑誌である。宇津木が「詩洋」同人に加わったのは一九三五年一月号からである。一九三六年二月号以降には早川の詩も多く掲載されるようになる。長谷部の詩は、調査の範囲では一九三八年一月号に最初に載り、以後しばしば掲載される。

この「詩洋」一月号では、宇津木の詩集『青き夜』（詩洋社、一九三七・一〇）が出た直後とあって、小特集が組まれ、關沢が「青き夜」の著者と作品とを、早川が「青き夜」を執筆している。『青き夜』の「跋」も書いている關沢は、そこで「郷里を同じくする関係上、著者とは色々と交渉が多かつた」と述べており、密な繋がりが見て取れる。また、「宇津木氏は六、七年以前盛に民謡を書いて居られた」ことを証言している。關澤も『民謡集 潮出来島』（日立書房、一九三五・五）の著者であり、同詩集には「方言民謡抄篇」として一〇篇の方言詩が収められている。こうした点に、方言を活かした「雀こ」への関心の源泉がうかがえよう。

第二号は三二頁。「編輯後記」は關澤潤一郎と宇津木賢が執筆。一九四七年一月一日発行。編輯兼発行人は早川利康。発行所は東京都江戸川区小岩町三の三二五火焰木社。定価一五円である。

この第二号には、「詩と詩人を語る」という宇津木・田中・早川による座談会が掲載されている。座談会の話題は「既成詩壇について」「所謂大家中堅詩人について」「チャーナリズムについて」など多岐にわたるが、「文壇人の詩について」語った部分で、多くの文壇人の詩には「詩の本念の仕事である形式探求がなんにもない」（早川）が、井伏鱒二の詩には例外的に関心を示す三人は、次のようなやりとりをしている。

田中 そりやね、井伏あたりだと、あたり前のことを書きながら、あれだけのとほげかたを押し出してゐるだらう。あれはね、詩の中で語られてる事件の生むとほげ方ぢやなくて、文体の生むとほげ方なんだよ。さう云ふことが読んでよくわかる。——と、云ふことは、井伏が、作家と云ふよりも詩人なんぢやないのかな。

早川 うん。

宇津木 井伏の他にそんなのがゐるかね？

田中 太宰なんかも案外詩人かも知れない。

早川 さう云ふ云ひ方をすれば、大分、詩人がふえる訳だな。(笑ふ)

このような大宰を「詩人」として評価する見方が、第三号における「雀こ」再録につながつたと考えられる(三号の「後記」を書いたS・Tは田中園人であろう)。

ただし、「火焰木」収録の本文は、従來の「雀こ」を忠実に再録したものとは言えない。内容を根本的に変えるような異同はないものの、「井伏鱒二へ。津軽の言葉で。」が「井伏鱒二へ、津軽の言葉」になつている(読点が句点になつたり、句点がなくなつたりしている)などの細かいがいは複数見受けられる。また、「かうして一羽一羽と雀こ貰るんだもし」という一節が「かうして一羽んだと雀こ貰る一羽どもし」と混乱した形になつている。「そろそろと晚げになつたずおん」の前の

一行アキがなくなり、「いつもの晚げのごと、おなじ昔噺をし、聞くのだずおん」の後に一行アキがある。さらに、冒頭と末尾の「長え長え昔噺、知らへがな」から「また、からすあ、があて啼けば、椽の実あ、一つぼたんて落づるずおん」までのリフレインのうち、末尾の方から「そのてつぺんさ、からす一羽来てとまつたずおん」の一行が抜けてしまつている。このように、再録にあつたつて作者や編者が意図して改変したとは思にくい異同が目につく。おそらく「火焰木」側のミスであろう。したがつて、「雀こ」の「火焰木」収録にあつたつては、太宰が許可したのは間違いないであろうが、その際に書き直したり、自らゲラに目を通したりはしなかつたと推測される。

以上、「雀こ」の戦後の詩誌における再録について紹介してきた。むろん「雀こ」は小説なのか詩なのかという議論にはあまり意味がないだらう。太宰治には、ジャンルを固定できない作品が珍しくない。たとえば小説とも随想ともつかない作品が存在する。「フォスフォレッセンス」(「日本小説」一九四七・七)や「朝」(「新思潮」一九四七・七)は明らかに小説として読まれる(後者は初出でも「小説」欄に発表されている)が、生前に『太宰治随想集』(若草書房 一九四八・三)に収められている。「海」(「文学通信」一九四六・七)は、「随筆」欄に発表されたが、太宰の「創作年表」(『太宰治全集別巻』筑摩書房、一九九二年四月)では「コント(海)」と記入されている。

詩誌「火焰木」の同人たちは、詩とは何かという問題について読者に考えてもらうきっかけになればと「雀こ」を再録した。ただ、太宰治作品の読者としては、生前に詩誌に再録され、作者も許可したというその事実によって、「雀こ」を読む際に、必ずしも小説という枠組みで読まなくてもよいことが示唆されたと言えるであろう。



「火焰木」目次（数字は頁番号を示す）

創刊号	宇津木賢	4
回想の譜	田中園人	6
夜	早川利康	8
冬日抄	高橋謙三	10
剣	高橋謙三	11
鬼火	長谷部龍	12
秋立	關沢潤一郎	14
歴史	早川利康	16
詩論以前の詩論	杉捷夫	20
歌（ミユツセ）	佐藤輝夫	22
バラード（ヴィヨン）	野住宏	26
橋をつくる	一條冬美	27
阿騎野の人麿	青柳かずを	28
女	比良木眞言	29
木影の宿	宇津木賢	30
同人雑記	田中園人	
	高橋謙三	
時評	D・C・C	30
火焰木賞・応募詩規約		
表紙	三岸節子	32

カヅト

三岸節子
田中田鶴子
成瀬嘉與子

第二号

晩夏 田中園人 2
 月夜 田中園人 2
 祈祷 安達太郎 3
 傑作 早川利康 4
 梟 竹吉新一郎 5
 メルヘン 高橋謙三 6
 新しい季節に 東郷克郎 7
 白粉 高具秀雄 7
 詩人への希望 兼常清佐 10
 春山行夫さんへ 安達太郎 13
 時評 D・C・C 14
 墓参 宇津木賢 15
 斧をふる人―亡父回忌― 長谷部龍 16
 秋風 花野二郎 17
 カンヴァス 關沢潤一郎 18
 神保光太郎さまへ 三越左千夫 19
 自由詩の苦悶 木下常太郎 20

北園克衛先生

A Soliloquy ―一月―

早川利康
中村忍 22
長谷部美津子 22

短章

草原にて

雨宮夏生 23
三越左千夫 23

夜の歌

青柳かずを 24

早春の花

天野精一 24

開閉橋風景

齋藤峯明 25

風の底へ

高島祥介 25

風

宇津木賢 26

詩と詩人を語る

田中園人 26

火焰木原稿募集・火焰木賞

早川利康 32

編輯後記

關沢潤一郎 32

宇津木賢

第三号

雀こ

太宰治 2

現代詩への訣別

早川利康 8

日蝕

高橋謙三 10

同族

宇津木賢 10

星の夜の歌

眞尾倍弘 13

丸山薫氏へ	高具秀雄	1	5
故井	則武三雄	1	5
有楽町	竹吉新一郎	1	6
罪祭	安達太郎	1	6
道	關沢潤一郎	1	7
小指	小林知	1	8
感情の天	青柳かずを	1	8
南の追憶	高具秀雄	1	9
北園克衛先生へ	早川利康	1	9
この頃の詩は	筏井嘉一	2	0
現代詩の壊乱	富澤赤黄男	2	2
詩雑記	網野菊	2	5
横光利一氏の詩	入交俊作	2	6
時評	D・C・C	2	8
狂宴	關口由記夫	2	9
冬枯	古谷田婉子	2	9
河童	天野精一	3	0
旅愁	齋藤峯明	3	0
短唱	長谷部美津子	3	1
火焰木原稿募集・火焰木賞		3	2
後記	S・T		